

優しい時代に

(公財) 日本野鳥の会 監事 曾我 千文

私が野鳥に興味を持ち始めた中一の春に、野鳥の会の会員になったらどうかと勧めてくれたのは父だった。初めて届いた野鳥誌を見て、父と二人で高尾山の探鳥会にかけた。

幹事さんのプロミナ（望遠鏡）を初めてのぞかせてもらい、手に取るように見えたシマシマ模様のコゲラの愛らしさや、真っ赤な嘴のブッポウソウの華麗さは、まるで昨日のここのように鮮明だ。それから一人であちこちの探鳥会に通った。今思えば父と鳥を観たのは、あれが最初で最後だ。



高校生になって東京港野鳥公園（当時は大井埠頭第七公園）のボランティアを始め、仲間と鳥を観に行くようになって探鳥会から足が遠のいた。監事を拝命して、野鳥の会のことを学生の時以上にまじめに考え始めた（学生の頃は、仲間と本当に熱く語り合ったものだ）。野鳥の会は全国の支部や連携団体と支え合っている強みを抜きには語れないと痛感し、支部のことを少しでも理解したいと思って、数年前から時々いくつかの支部の探鳥会に参加し始めた。

驚いたのは、探鳥会が約40年前とまったく変わっていないことだ。長きにわたってボランティアリーダーたちに受け継がれてきたスタイルは安定しており、主催者側にも参加者にも居心地がいい半面、会員減少の潮流が続く中、支部の幹事さんたちもこのままでいいのかという疑問や焦燥を感じているようだ。

そんな中、一昨年度から、財団普及室主催で、支部や連携団体で、探鳥会運営に関わっている人たち対象に、「リーダーズフォーラム」が行われるようになった。全国の支部のリーダー同士が知り合い、支部を超えた交流を通じて探鳥会の運営技術の向上を目的にしており、私も参加させていただいている。全国の支部から、集まった探鳥会リーダーが、ひとつも情報を聞き漏らすまいと耳をすませ、迷いながら悩みながら自分の経験を語る姿には胸が熱くなる。今年度は、秋に神戸で、年明け1月に再び東京で行われるそうだ。さらなる盛会としたい。

もし、このフォーラムが15年ほど前に行われていたとしたら、「探鳥会の運営技術を向上する」ために、リーダーたちは、例えば、ハシブトガラスとハシボソガラスの違いをいかに伝えるかとか、夏鳥のさえずりを、どんな風に面白い聞きなして表現するかとか、野鳥の識別や生態を、いかに参加者に理解してもらえるかのスキルを研鑽しあうことに白熱したことだろう。

今もそういった議論はもちろんあるけれど、むしろリーダーたちの関心は、いかに参加者の心をつかむか、いかに気持ちよく探鳥会を楽しんでもらえるか、初めて参加した人、一人で参加した人にはどんな配慮が必要かというような、参加者の気持ちに寄り添うことに心を砕いている。

そんな「探鳥会の今」を見聞きしながら、私たちはいま、とても優しい時代、そしてある意味とてもむずかしい時代に生きているのだと思う。

おそらく鳥には興味がなかった自慢の父は、この春逝ってしまった。父が遺してくれた鳥好きの私は、これからもずっと鳥が好き、鳥好きが好きである。

(そが・ちぶみ)